

*環境問題と聖書

近年とみに環境問題がマス・コミをにぎわせており、いやが応でも関心をもたざるを得なくなってきた。事実、この問題は地球全体の問題として国際的レベルで取り上げられ、政府や科学者や文化人の間で討議されたり、議論されたりしている。日本でもこの問題と積極的に取り組む自治体や市民団体が増えてきている。また、企業も環境保全を全面に打ち出すようになってきた。こうして、徐々にではあるが、一般市民の間でもこの問題が意識されるようになったばかりではなく、環境汚染をなくすための具体的な行動が広く行われるようになってきた。教会でも、活動面だけでなく、神学の立場から取り組みは始めている。我々もここで環境問題について聖書が何を語っているかに注目したい。この拙論が、環境問題を信仰の立場から考えるためにいくらかでも示唆を与えてくれるなら、幸いである。

ところで、司祭は「地上のいのちとは別のいのちの証人であり、管理人でなければ、キリストの役務者であることはできない。しかしまた、人々の生活とその状況にかかわりのないよそ者であっては、人々に奉仕することはできない」(PO3項)。そして、このことが信徒を含む教会全体にあてはまることは言うまでもない。では、まず環境の現状を一瞥した後、聖書が環境問題にどのような光を照らしてくれるかを探ってみよう。

司祭叙階50年記念

神はいつもわたしたちと共に

著者 高見三明
 発行日 2022年12月25日
 発行所 株式会社 インテックス
 長崎市幸町6番3号
 Tel 095-826-2200

I 環境の現状

環境の破壊は、もはやある特定地域とか特定の国に限らず、全世界的規模で進みつつあり、しかもかなり深刻な状況にある。ここでは、その主な問題を列挙するにとどめる。

1 大気汚染

一九七〇年代後半から、春先になると北極上空にスモッグが生じるようになった。それは、春になると、自動車や工場からはきだされる亜硫酸ガスや窒素酸化物などの大気汚染物質が、北アメリカやヨーロッパ大陸それにアジア北部を通る風につれて数千キロメートルも運ばれてくるためである。このスモッグの中には、鉛、マンガン、亜鉛などの重金属類、冷蔵庫やエアコンの冷却剤などに使うフロンガス、農薬のDDTやクロルデン、電気製品に多く使われているPCB(ポリ塩化ビフェニル)などが含まれている。この結果、シロクマ、アザラシ、魚類、鳥類、それに原住民は次第に汚染されている。しかし、このような「人間の作り出した」有害な化学物質は北極だけでなく、南極、ヒマラヤ山頂の雪から太平洋の深海まで、そしてそこに生息する動物から検出されている。この有害物質が多くの先進国に蔓延しつつあることは言うまでもない。

2 オゾン層破壊

地上一万二千から五万キロメートルの間にオゾン層がある。これは、太陽からの紫外線の九九パーセントをさえぎり、人間をはじめ、地球上の生物を守ってくれている。ところが、このオゾン層が薄くなっていることが、一九八二年、日本人学者によって南極で発見された。それ以来、毎年春、南極上空のオゾン層が四〇パーセントも減り、北米大陸の二倍にもなる穴(オゾン・ホール)があいていることがわかった。そして、この穴の原因は、フロンガスであることも明らかにされてきた。フロンガスとは、ヘアスプレーや殺虫剤などに入っているガス、冷蔵庫やエアコンを冷やすための冷却剤、消化剤、あるいは発泡スチロールなどである。全世界で毎年、八〇万トンほどのフロンが生産されており、これは過去二十年間で十倍に増えている。このフロンガスは、使用後、ゆっくり上昇して、十年ほどで成層圏に達し、そこでオゾンと反応してそれを破壊する。その結果地上に達する紫外線は、人間にとって皮膚癌の原因となる。アメリカ政府は、現在のようにオゾン層が失われていくなら、同国内で二〇七五年までに四千万人が癌にかかり、八十万人が死ぬと予想している。そのため、一九八九年五月に開かれた国際会議で、今世紀内にフロンガスの使用をいっさいやめることが決議された。

3 海水汚染

海は地球上の酸素や水分のほとんどを供給している。その海の汚染もすすんでいる。北海には、ヨーロッパの国々の工場の排水や都市の下水、それに船舶や北海油田から大量の汚染物質が流れ込んでいる。その中

には、藻やプランクトンを大量に発生させて赤潮の原因になる窒素分や、発癌性のある化学物質、さらに有毒な重金属などが含まれている。一九八八年に約一万八千頭にもおよぶアザラシが死体で海岸に打ち上げられているのが発見された。死んだアザラシからは、濃度の高い水銀、カドミウム、鉛、PCBなど、少なくとも一五十もの有害な物質が発見された。これは、人間の命に危機が迫っていることを警告していると考えべきである。また、アラスカ沖で沈没したタンカーからのオイル流出や湾岸戦争時のペルシャ湾のオイルによる汚染は大きく取り上げられたが、問題は海の向こうのことだけではない。我々の住む地域の河川や湖や海も徐々に汚染されている。

4 森林破壊、酸性雨

次に、森林の破壊消失とその結果としての異常気象と砂漠化という問題がある。国連の統計によれば、地球の陸地面積約一三〇億ヘクタールのうち、約二八億ヘクタールが密生した森林、約一二億ヘクタールがまばらに生えた森林である。ところが、一九六〇年頃の統計で地表の四分の一を占めていた森林が、三十年後には五分の一に減ってしまった。このままでは、今世紀末には、森林の面積が地表の六分の一以下になるのは確実と考えられている。森林破壊は、特に東南アジア、中南米、アフリカの熱帯雨林で急速にすすんでおり、それら三地域にはかつては一六億ヘクタールあったのが、現在は九億ヘクタールだけになっている。熱帯雨林が消える最大の原因は焼き畑農業であるが、第二の原因は先進国による伐採である。日本は、東南アジア、ソ連、アメリカ、カナダなどから木材を輸入しているが、全熱帯材の三十パーセントも消費している。熱帯

雨林の場合、温度が高いために土の中の有機物(枯葉や死んだ生き物)がすぐ分解してしまうので、地表を覆う土壌は二〜三センチメートルの厚さしかない。そして、スキのような頑丈なイネ科の雑草が生えると、あとは何も育たないし、植林しても成長するのに数十年はかかる。国連の推定では、10ヘクタールの森林が破壊されるのに対して、わずか一ヘクタールしか植林されていない。さらに、森林伐採の結果、洪水が起きやすくなったり、森に依存して生きている人々は生活できなくなっている。その中で生きる生物も生きる場を失い、多くの種類の生物がすでに絶滅し、あるいは絶滅の危機にある。

他方、酸性雨による森林の死滅も深刻な問題である。すでに全ヨーロッパの針葉樹の五本に一本は弱ったり、枯れたりしている。しかも湖沼こしよの魚や他の生物も死滅している。この現象は、北欧やドイツ、アメリカ北部とカナダなどに顕著に見られる。この原因は、おもに自動車や工場などから排出される亜硫酸ガスや窒素酸化物が大气中で何らかの化学変化をうけて硫酸や硝酸に変わり、雨や雪に解け込んで降ってきたことにある。酸性雨の被害を受けたのはまず湖沼や河川かせんであった。水が酸性化すると、敏感なプランクトン類や水生植物が減り始める。すると、これをささにして魚類が死滅する。現在、スウェーデンでは、10万の湖沼のうち、約二〇パーセントで魚や他の生物が全滅し、カナダでは、アメリカ国境に近い四千の湖沼で魚がほとんど死滅している。次いで被害は森林へと及んだ。酸性雨が植物の葉を痛めつけて呼吸できなくなったり、土が変化したため毛根や植物を助けている有益な微生物が殺され、こうして樹木が弱ってしまい、ついには枯れてしまふ。このような酸性雨による被害は、先進工業国だけでなく、インド、マレーシア、メキシコ、ブラジルなどにも出てきている。

5 地球温暖化

森林は、根の周りに大量の水を蓄えるだけでなく、巨大なダムの役割をも果たしている。木の葉は、炭酸同化作用の働きで空気中の二酸化炭素を吸収して酸素を出す。このような森林のおかげで人間をはじめさまざまな生物が生きている。ところが、今、森林伐採のために二酸化炭素の量が増大している。その原因は明らかである。すなわち、(1)二酸化炭素を吸収するものがなくなり、(2)伐採された木は、木材になっても紙になってもいずれは燃やされるか、腐って二酸化炭素を出し、(3)森林の土の中にたまっていった落葉や根が腐って、二酸化炭素の発生源になるからである。

大気中の二酸化炭素は、ちょうど温室のガラスのように、太陽光線は自由に通しても、熱を逃がさない働きをもっている。そのため、とくに一九八〇年以降世界的に気温が上昇しており、各地で猛暑と干ばつのため被害が続出している。このまま二酸化炭素を出し続けると、二〇三〇年頃には、平均気温が今より三度以上上がる可能性があると言われる。すると、北極や南極の氷が解けて、全世界の水位が上がり、水没する地域も出てくる。

6 砂漠化

森林の少ない乾燥地帯では、遊牧民や農民が少ない雨をたくみに利用して生活している。しかし、人口の増加に伴って開発が進み、わずかに生えた低木は燃料になり、焼かれて畑や放牧地になる。家畜は葉や草を食べる。そして貴重な表土(一センチできるのに百年から四百年かかる)が失われる。すると植物は育たなく

なる。こうして、次第に砂漠化が進んでいくことになる。この現象は、アフリカだけでなく、全世界の砂漠地帯で起こっている。国連では、毎年、全世界で六百万ヘクタールの土地が砂漠になっていると見ている。そして、この砂漠化で困っている人は、現在、世界の人口の六人に一人、八億五千万人いると言われる。

7 あふれるゴミ

先進国には、あらゆる種類のゴミがあふれており、それを捨てる場所がなくなってきた。また海には、プラスチック製品などが漂っている。漁師や船員が捨てたりなくしたりする包装材や釣具だけで年間六万トン近くになるだろうと推定されている。簡単な使い捨てや商品の過剰包装も問題である。また、燃えないゴミや車や注射針などを所かまわず捨てる人が後を絶たない。さし当っては、世界中のひとりひとりがゴミを少なくするよう努力することが急務である。

このような悲惨な自然環境破壊は、結局人間が自己の欲望を満たすために、自然が自分の生命と一体となっていることを忘れ、それを全く顧みなかったことに起因する。その結果、人間は自然の返り打ちを受けつつあるのである。しかし、わたしたちは、科学・技術文明の恩恵に浴すれば浴するほど、環境破壊の加害者になると同時にその被害者にもなるということを忘れてはならない。

Ⅱ 聖書は自然環境について何を教えているか

1 聖書と環境問題

(1) 聖書は環境問題を知っている？

神が、アブラハム以来、イスラエルの民に与えると約束されたカナンの地は「乳と蜜の流れる地」(出13・5、33・3、民13・27、14・8、16・14など)と呼ばれている。つまり、それは、豊かな自然に恵まれた土地だということである。旧約聖書や考古学的調査によれば、パレスチナとその周辺の森林は現在よりはるかに広範囲に広がっていた。たとえば、「林の村」という意味の地名キルヤト・エアリム(サム上6・21、代上13・5)は、現在のそれより大きな森林地であったことを暗示している。土地の荒廃の主な原因として、戦争と樹木の伐採それに牧畜などが考えられる。

パレスチナはメソポタミアとエジプトの間の通商路になっており、大国間の争奪的になったし、イスラエルの民もまたその入植の時から新約時代に至るまでしばしば戦禍に見舞われた。戦争時には、ぶどう、いちじくなどの果樹や小麦などの穀物が焼き払われるのが常であった。しかし、森林が神の罰すなわち戦災によつて焼かれたらしいことが記されている(イザ1・7、10・18-19、エレ4・16-28、5・15-17、21・14、25・32-38)。

聖書の中で環境破壊に言及しているもう一つの顕著な例は、森林伐採であろう。イスラエルが約束の地に入ったとき、ヨセフの子らのエフライムとマナセは中央山岳の森林地帯を開拓して占領した(ヨシユ17・14-18)。しかし、とくにレバノン山系の森林伐採は環境破壊につながった。レバノン杉(香柏)は、香ばしく(雅4・11、ホセ14・6)、その堅くて太い幹はまっすぐ高くそびえ(アモ2・9)、建物や船舶の第一級の木材であった。その価値の高さは、神が植えた神の木々(詩104・16参照)とまで言われていることわかる。エゼキエルは、エジプト王のことをレバノン杉にたとえて、気品と美しさと強靱さを備えた権力者として讃えている(エゼ31・3-8)。しかし、ファラオが減じる運命にあつたように、レバノン杉も減びることになる。皮肉にも、レバノン杉は、驕れる者の象徴でもあつたのである(詩37・35)。エゼキエルも、レバノン杉で財をなし傲慢となったティルス王を断罪している(エゼ27・1-5、25-36)。ところで、レバノン山系は、かつて南はガリラヤ、サマリア、ユダ、さらにネゲブにまで及んでおり、その一帯には森が広がり、泉がこんこんと湧いていた。今は見られないが、レバノン山脈の西側やヘルモン山にもレバノン杉があつたようである。このような大木を国内に持つていなかったエジプトやメソポタミアの諸王は、競つてこの逸材を獲得しようとした。イスラエルの王も例外ではなかった。ダビデがエブス人の町を攻略し、ダビデの町と呼んだ時、ティルスの王ヒラムはダビデ王のもとにレバノン杉とともに木工や石工を送つて、彼の王宮を建てている(サム下5・11)。とくにダビデの後継者ソロモンは、神殿と宮殿建築のために、食糧と引き換えにヒラム王からレバノン杉を欲しだけ入手することができた。レバノンで伐採されたレバノン杉や糸杉はフェニキアでいかに生まれ、海上をヤッファまで運ばれ、さらにエルサレムまで運び上げられたのである(王上5・15-26、代下1・18-2・15)。この大事業のためにソロモンは、イスラエルの労働者を「一万人づつ一か月交替でレ

バノンに送った(王上5・28)。また、ソロモンはお礼として、ヒラム王にさらにガリラヤ地方の二〇の町を贈っている(王上9・10-13)。ともあれ、彼は、まさに「エルサレムで銀を石のように、レバノン杉をシェフェラのいちじく桑のように大量に供給」(王上10・27)して、神殿建立のために七年、宮殿建築のために一三年かけたのである(王上6・38、7・1)。こうして、神殿にもレバノン杉や糸杉が用いられたが(王上5・15-20、6・9-10、15-22)、レバノン杉を柱や梁や床などにふんだんに使って建造された宮殿は、「レバノンの森の家」(王上7・1-12、10・17-21、代下9・15-20、イザ22・8)と呼ばれたほどである。このレバノン杉は、捕囚後の神殿再建の時も、ペルシア王大流ウスの命令によって、同じ様な経路でエルサレムに運び込まれた⁽¹⁾。

こうして、レバノン杉は紀元前三千年頃から近代に至るまで伐採、加工、搬出^{はら}されてきたのである。これまでの何千年もの間に、「破廉恥^{はれんち}で思慮の浅い、物の値打が判らず感謝の気持ちに欠けた利己的な人間が、恵み深い自然の手になるこの素晴らしい作品を、地上に残しておくことに満足できないとでもいうように、『文明』のために、熱心にもっと多くの木を伐採し、多くの土地を自分たちがかつて味わった栄光の残骸に加え、すべて自分たちの飽くことを知らない貪欲さをみたすために、大地の緑の森に挑んで来」たのである。しかし、自然の復讐と天罰は、野生の生物や動物の絶滅、自然の調和の破壊という形をとって人類に下された。「たとえば、傾斜した土地を、火星の風景のように変えてしまう侵食、『開拓された』貴重な土地を押し流す溝、通過した後には破壊した残さない洪水、かけがえのない表土を運び去る砂じん、生意気な人間に集団移住を余儀なくさせる早ばつ地帯、あげくの果てに、誰も住めない砂漠地帯を現出」する。「これが、実はおおざっぱ

に見た聖地の歴史で、聖地は『乳と蜜がながれる』ヤシの茂る土地から、現在の荒れ果てた砂漠に一変して」しまったのである⁽²⁾。もともと、聖書の意図は、レバノン杉の伐採を環境破壊をもたらしたとして断罪することにあるのではない。むしろ、ソロモンの行った交易を、神が彼に与えた「知恵」の一つのあらわれとみなして讚えることにある(王上5・26)。他方、ダビデやソロモンによるレバノン杉の伐採がパレスチナとその周辺の地理と気候に直接甚大な悪影響を及ぼしたということもできない。それにしても、彼らの建設事業が、かつては豊かであった森林を荒廃させた人類の歴史の一部を成しているのは確かである。

(2) 聖書は環境破壊の張本人？

一方では、キリスト教は、科学を理解せず、それと対立し、その発展を妨げた、と非難する声がある。確かに、過去においては、科学と信仰との悲しい争いがあった。しかし、それは、ある神学者たちの狭量さや、信者の科学的知識の不足からだけでなく、科学的問題を深めるはずであった人々の準備不足からも生じた(GS 62項参照)。ところで、他方、西洋に端を発する自然科学や技術文明は、もとはと言えばキリスト教、とくに『創世記』1章の教えである、と断言する人々が少なからずいる。たとえば、科学技術史家リン・ホワイトは、次のように言っている。「物理的創造のうちどの一項目をとっても、それは人間のために仕えるという以外の目的をもっていない。……人間は自然のたんなる一部ではない。人間は神の像を象^{まな}って作られているのである。……人は神の自然に対する超越性を分けもっている。キリスト教は、人と自然との二元論をうちたてただけでなく、人が自分のために自然を搾取することが神の意志であると主張した。……西欧科学の

その長い形成期の何世紀もの間、科学者たちが一貫して、科学者の仕事と報いとは『神にならって神の考えを追うことである』と言いつづけてきたため、これが科学者の本当の動機であると信じるようになった。もしそうであるならば、そのときには、近代的な西欧科学はキリスト教神学の母体の中で鑄造された。……いまから一世紀ちよつと以前に、それまで全く離れていた活動であった科学と技術が一緒になり、多くの生態学上の結果から判断して、抑制のきかない力を人類に与えたのである。もしそうなら、キリスト教はとてつもない罪の重荷を負っている¹⁴」。この最後に言われているように、「もしそうなら」、確かに重大な問題である。しかし、果してそうであろうか。ここではこの歴史的な問題に入る余裕はない。

ただ、参考のため、第二バチカン公会議が科学について述べていることを簡単にまとめておこう。公会議は、二様の認識系列(理性と信仰)があることを再確認し、学問の正当な自律性を肯定する(GS 59項)。本来、科学は、現実を理解し、人間を善と美の概念へと高めるのを助けることを目的としている(57項)。その限りにおいて、科学は、自己の領域において独自の意見を探し求め、考え、表現する正しい自由を享有すべきである(62項)。しかし、だからと言って、教会は科学が自ら得たものを正直に正しく応用するのを助けるため、科学的問題を深めることを免じられているということではない。なぜなら、そのような応用は、道徳原理と矛盾あるいは対立したり、人間一人ひとりの自由を抑圧するものであってはならないからである。従って、科学的探求と応用の自由は、各人の自由と対立すべきではなく、さらに政治権力や経済力に利用されてはならない(59項)。結局、科学は、人間のために神によって造られた自然の力を用いることを可能にし、神の業をよりよく知ることを可能にする手段であり、神だけが全人類の終局目的である。「万物には、……それぞ

れの持続性、真理、善、固有の法則、秩序が備わっている。……あらゆる分野において、真に科学的な方法を用い、道徳規範に従って行われる体系的な研究は、決して信仰に対立するものではない。……実際、謙虚に、根気よく物事の隠れた部分を究明しようとする者は、自ら意識することはないとしても、万物を支え、それぞれをそのものたらしめる神の手に導かれているようなものである」(36項)。最後に、この問題に関連する回勅『真の開発とは』(一九八七年十二月)の中で、教皇ヨハネ・パウロ二世は次のように述べている。「人間の自由になる資源や能力の相当部分が倫理的理解によって、また人類の真の善を志向する方向づけによって誘導されない限り、これらは容易に人間を抑圧し、人間に害を与える存在と化す……。真の開発は、所有や支配や利用を、神の似姿である人間に、そして人間の不滅への使命に従わせるところに存在するのです¹⁵」。

2 聖書は自然界について何を教えているのか。

(1) 聖書における創造信仰

聖書を開くと、まず天地創造について語られている。それは、宇宙と人間の住む大地と自然界のすべてが神によって創造されたという信仰の表明である。そして、キリストを信じる者は、キリストが「創造主である神」の子であり、創造の業に参与したと信じる(コロ1・15-17参照)。ところで、一般に、創造信仰は、イスラエルの民が神の力によってエジプトから解放されたという救いの体験を経て生まれたと考えられている。「イスラエルは自らの神を自然からではなく歴史から学び知った。イスラエルは神を何よりもまず民の救済神として

理解し、その救いのわざの体験から創造信仰が成長したのである。しかし……創造信仰なるものは単なる起源論ではない。創造のわざは現在のなものであり、終末の救済へと自らに忠実でありつづける。……創造は……神の偉大なわざに属しており、すべての救いの出来事の根底にある救済のわざそのものである」¹⁵。いずれにせよ、創造はエジプトからの解放と同様に神の力(エレ27・5)と慈愛と約束に対する忠実さ(イザ54・5-10、詩33)を証明している。こうして創造は救いの働きとともに、神の不思議なわざとして讃えられている(イザ42・5-7、45・7-8、詩74・13-21、89・10-15、¹⁴⁹シラ43・27-43)。

(2) 人間と自然(創世記1-2章)

これら二つの章には、二つの異なった伝承に属する創造物語が含まれている。すなわち、1・1-2・2aは祭司伝承に、2・4b-25はヤーウエ伝承に属している。より古い後者は、素朴で神話的な表現を用いながら、初めから荒涼とした、水気のない地があり、神がそこを水で潤わせ、人が住むのにふさわしい場所に作った、と言う。そして神は、陶器工のように人間を造って自分の命を吹き入れる。さらに動物も造るが、彼らは人間にとつてもっともふさわしい伴侶にはなりえない。それは女性である。こうして、人間を中心とした世界の創造が完成する。しかし、この人間は最終的な中心ではない。ここで描かれているエデンの園は神の神殿、すなわち神の住まいとも言えるからである。園の中心には「命の木」があり、人はそれにふれることはできない。また、もう少し後に出て来る「主なる神が園の中を歩く」(3・8)という表現も神がそこにおられ、人が神と共にいたということを示唆している。結局、人間は神によって世界の中心的存在として、「園を耕すため」つまり世界を発展させるために「造られた」のであるが、神から完全に独立して独り歩きするためではない。むしろ、神と共にいることに人間の本来の姿があるということである。

第一の創造物語は、捕囚時代に編集されてものと考えらる。そうであれば、バビロニアの天体を神々として信じる偶像崇拜に対抗して、唯一の生きた神が宇宙とそこにあるすべてのものを創造したという信仰の表明として理解するのはやさしい。ここでは、神の固有の行為としての創造を表すために「バーラー Data」という特別な動詞を用いている。それは、いかなる素材も必要とせず、言葉によってあらゆるものを生み出す神の不思議な力を言い表そうとしている。この創造物語においては、まず光が、次いで天と地という枠が造られ、その中に天体や植物や魚や動物が置かれる。そして最後に荘厳な定式文をもって人間が創造される。叙述の仕方、あるいは全体の構造からして、また神が語った言葉からして、人間の創造にもっとも重きが置かれていることは明らかである。それでは、もう少し詳しく見てみよう。

この創造物語は、次のような教えを含んでいる。

(a) すべての被造物は、神の言葉によって造られたのであり、それはすべて「良い」ものである。なぜなら、六日の創造の度に、神が『…あれ』と言われると、そのようになり、それを見て、神は「良し」とされ、しめくくりとして、造られたすべてのものが「極めて良かった」(創1・31)と言われているからである。宇宙界と人間や動植物を含む自然界は、すべて良いものとして神によって造られ、従って神に依存している、と言わ

ければならない。

(b)人間は、世界の中に組み込まれていると同時に、世界を支配する使命を託されている。すなわち、「一方において人間は、創造主に向き合った形でその存在を得ている被造物としての世界の中に、全面的に組み入れられている。しかしながら同時に、人間は特別な仕方で際立たせられ、他のすべての被造物とは区別されている。すなわち、その他のすべての創造の業の場合には、それぞれまず始めに、事物を次々と存在へと呼び出す神の命令的な言葉が発せられるのに対し、人間の創造だけは、神が自分自身に語る熟慮の言葉で始まるのである。『我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう』(1・26)¹⁶」。人間が神に似せて造られた特別な存在であるということは、他の生き物をすべて「支配せよ……従わせよ」(1・26、28)という神の命令によってさらに明らかにされている。しかし、人間にも他の生物と同じように、多産と豊穡の祝福が与えられている。人間は、他の生物と結ばれ、さらに植物とも結びつけられている(1・29)。この聖書が示す「人間は自然の一部であり、自然と一体である」という考えは、東洋思想にもはつきりと見られる。しかし、「人間は自然を支配する」という考えは欠けている。そのため、科学は自然を支配する人間の働き的一端を担っていると、その起源をキリスト教に求める意見も出て来るのである(鈴木大拙など)。

(イ)「産めよ、増えよ、地に満ちよ」

『創世記』1章の創造物語において、動物と人間は存在させられる方法は異なっているが、いずれも神から「産めよ、増えよ」という祝福の言葉を受けている。彼らには、ある意味で自分に与えられた生命の力で増え広がることになるのである。「産めよ、増えよ」の後には、魚と鳥に対しては「海の水に満ちよ。鳥は地の上を増えよ」と言われているが、人間に対しては「地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ」と言われている。ノアの時の洪水によって元の混沌にもどった後、地上が新しい生命に満たされるために、「ノアと彼の息子たち」に対してこれと同じ祝福が与えられることになる(創9・1・2、7)。「ここで祝福の言葉を発し、その言葉によって、彼自身が創造した世界の諸部分を、不思議なほど強力な祝福の力で満たすのは、創造主自身なのである。したがって祝福は、決して彼岸的なものではない。それはこの世のただ中に、すなわちこの世に生きる動物と人間の生命の中に注入されているのである。したがって、祭司文書の語り手によれば、旧約聖書の信仰は、多産と子孫の増大を通じて、彼らの神の祝福を聞き取るのであり、またそのことによって、自分たちが、この目に見える世界に全面的に組み入れられていることを改めて知るのである」¹⁷。人間に与えられた多産の祝福は、あくまで創造主である神の側からの自由な賜物であり、神に依存している。他方、その賜物を喜び受けつつも、責任をも担うのである。すなわち、自然に反するあらゆる性的倒錯を避け、神の望まれる結婚生活を営まなければならない(出20・14、17、レビ18、20・10-21、申5・18、21、22・13-29、24・1-4、25・5-10)。神に祝福された結婚は、神と人間の間係だけでなく、人間同士の関係の基礎である。

しかし、人間は、その祝福の与え主を忘れ、自己中心的になる危険性ももっている。夫は妻を抑圧し(創3・16)、あるいは女は男を誘惑する(3・6、7・26-29)。それでも、神の祝福は与え続けられている。¹⁸

生命を宿し、成長するものに植物も含まれている。創1・11-12によると、植物は地から生じている。しかし、「大地はそれ自体の神性によってそのようなことができるのではなく、神の命令により、そのような行為を可能ならしめられるのであり、またそうすることを、義務として課せられるのである。すべての生命力と繁殖の能力は、ただ一人権力を持つ者の力強い命令から引き出されているのである」¹⁹。

こうして、人間を含む動物の世界でも、植物の世界でも、創造主である神が彼らの多産と繁栄の不思議な力を展開させているのである。このような不思議な神の働きに、人々は賛嘆せずにはいられなかった(詩65・10-14、139・13-18)。結局、人間は、動物や植物と深いつながりをもって生きるものとされている。創2・7および18-19によれば、動物も人間も同じ土から造られている。しかも、彼らが、人間の「助け手」のいわば最初の候補者であった。ここから、家畜や動物をいとおしむべきであるという考えが出て来るのは当然であらう(箴12・10、申5・14、25・4、22・6-7)。

(口)「地を従わせよ。…すべて支配せよ。」

創1・26によれば、神は人間を自分に似た者として創造したが、人間が神の像であることの意味は、人間が彼以外のすべての被造物を支配することにある(シラ17・1-4参照)。「神は言われた。『我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配せよ』」。このことは、命令の形で確認される。「神は彼らを祝福して言われた。『産めよ、増えよ、地に満ちて地を従

わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。』」さらに、「神は言われた。『見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる。地の獣、空の鳥、地を這うものなど、すべて命あるものにはあらゆる青草を食べせよ』」(創1・26、28-29)。表現上多少の違いはあるが、これと同じ命令は、洪水の後、ノアと彼の息子たちに与えられている。「産めよ、増えよ、地に満ちよ。地のすべての獣と空の鳥は、地を這うすべてのものと海のすべての魚と共に、あなたたちの前に恐れおののき、あなたたちの手にゆだねられる。動いている命あるものは、すべてあなたたちの食糧とするがよい。わたしはこれらすべてのものを、青草と同じようにあなたたちに与える。ただし、肉は命である血を含んだまま食べてはならない」(創9・1-4)。人間が他の生き物を支配すべきであるという思想は、創2・19-20にも表れている。「主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来て、人がそれをそれぞれどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった。人はあらゆる家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名を付けた・・・」。「名」を付ける行為は、名を付ける者が、名を付けた相手の上にあるということ、従って彼に対する支配権を持つということを意味する²⁰。人間には、神の像としての存在ゆえに、地を従え、生物界全体を支配すべきなのである。

しかし、聖書は、自然科学研究によって世界の極小と極大の諸要素を探索し、技術によって科学的知識を生活に応用して安楽な生活様式を作り出すというような、近代的意味での世界支配を知らない。聖書の記述は、人々がまだ魚の捕獲や動物の狩猟あるいは家畜の利用などによって生活を営んでいた時代を背景としている。それでも、人間は、まさに漁師や狩人や牧者として世界の支配者であったのである。さらに、人間はその知

恵によって世界を支配すると考えられている。その例は、王上5・13(知7・17-22)やヨブ38-39に見られる。聖書では、職人(出31・2-11、35・30-35)や農夫(イザ28・23-29)も知恵者と呼ばれている。そして、世界の現実をよく知ることは、人生を成功に導くとも言われている(箴6・6-9)。この知恵の源は神である。神は、その知恵をもって世界を創造した(箴8・22-31、知7・22、8・5-6)。

人間は他の被造物と同じように、またそれらと共に、神の支配のもとにある。詩編8は、人間の被造物としての小ささと同時に支配者としての偉大さを讃えている。しかし、神こそ力強く、全地に満ちているのである。また、上に引用した創1・29-30には、人間には食べ物として草と果実が与えられ、動物には草が与えられたと記されている。これは、元来人間は動物を殺さなかったと言いたいのかもしれない。なぜなら、洪水の後、人間は肉を食べてもよいようになったからである(創9・3)。しかし、ここでも「肉は命である血を含んだまま食べてはならない」という条件がつけられている。なぜなら、命の与え主はただひとり神だからである(創2・7、レビ17・11、ヨブ33・4、34・14-15、詩18・47、104・30)。これは、人間が単にすべてのものの主人でないことを想起させるためである。

自然に精通する知恵者も、人間であるかぎり、「すでに自然の知識という領域において、彼の悟性を凌駕する神の啓示に直面するのである。この領域には、世界を自分のものとして支配するという人間の可能性に対して、明確な限界が課されているのである」。なぜなら、一方では、人間は外部の世界でさえ完全に統御できないのであり(ヨブ42・1-6、コヘ1・5-7)、他方では知恵は神から来るからである(知8・21)。人間には神から知恵が与えられ、「地上のものを治める権能を授けられ」、「獣や鳥を支配する」ようにされたが、

主に対する畏れも植えつけられた。それは、彼らが神の偉大さを知り、それを宣べ伝えるためである(シラ17・1-14、コヘ3・14)。

『地を従わせよ』という神の委任において言われているものは、あくまで常に神によって支配された世界であり、決して、その中で人間が、みずから作り出したものによって、自分自身の独自の安定した領域として定住できるような世界ではない。被造界は人間のためにあるが、その「人間のために」の意味が問題である。パウロは、「万物は御子によって、御子のために造られました」(コロ1・16)と断言している。

(3) 自然を讃え、慈しむ

環境破壊が進んだ今、人々は「地球にやさしく」と語り合うようになったが、聖書は自然を讃える言葉で満ちていると言っても過言ではない。それは、天体の運動、自然の生命の不思議な営みなどは、神の偉大な力に由来すると考えられているからである(詩8、19、29、33、93、96、104、148、ダニ補遺29-67)。『創世記』の創造物語において、世界は、それ自体において完結した法則や秩序ある構造をもっているのではなく、むしろすべてのものが、はるかにより直接的に、主とその意志とに関係づけられている。むしろ、自然そのものが創造主に仕えている(知16・24-29)。つまり、神を讃え、神を宣べ伝えているのである(詩19・2-7)。結局、人間は、自然の不思議さに感嘆し、その素晴らしさを歌うとき、その創造主をたたえる。そうであれば、自然に対する接し方も共存共栄という形をとるはずである。「申命記法典」は、ユーモアを交えて、ある町を

攻略するとき、その町の木(おそらく果樹のことであろうが)を切り尽くしてはならない、と命じている。「一体、野の木はあなたの前から城壁に囲まれた町に逃げ込む人間なのか」(20・19-20)。

イエスも自然を愛した。それは、みな天の父が守り支えておられる。「空の鳥をよく見なさい。種も時かず、刈入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。……野の花がどのようにに育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる」(マタ6・26-30)。イエスの話の中には、麦、いちじく、ぶどう、あざみなどの植物の名も頻繁に出て来る。

(4) 人間の罪

エデンの園におかれた善悪の知識の木は、神を中心として生きるか、それとも神を必要とせず、神なしで生きるかの選択をせまるものであったと言える。しかし、最初の人は、自由を濫用して、後者を選んだ。その結果、神と人、人と人、人と自然との間の一致と調和がすべて崩れてしまう(創3)。神のいない人間の世界は、どんなに一致しようと努力をしても、分裂と混乱しかないのである。このことは、バベルの塔の物語でも強調されている(11・1-9)。

『申命記』28-30章によれば、イスラエルの民は、神との契約を守るならあらゆる祝福を受けるが(28・1-14)、守らないなら呪われて、病気や災害や敗戦によって国を荒され、他国に捨てられる(28・15-68)。そのとき、「全土は硫黄と塩で焼けただけ、種は蒔かれず、芽は出ず、草一本生えず、主が激しく怒って覆されたソドム、ゴモラ……の惨状と同じ」(29・22)になるであろう。これは、賜物として与えられた豊かな土地は、神の掟を守ることとおして維持され、繁栄させられる、ということを教えている。

人類の罪の歴史を見ると、神の不在が人間を不幸にしているといわなければならない。これと同じことが、科学・技術がもたらした弊害についても言えるのではないだろうか。なぜなら、人間中心主義的な科学は、結局神を無視したものにほかならないからである。

(5) 被造物の贖い

神が万物を造った目的は、彼らが生きることにある(知1・13-14)。神は、悪人の死さえ望まない(エゼ18・23)。「神は人間を不滅な者として創造し、御自分の本性の似姿として造られた」(知2・23)。しかし、「悪魔のねたみによって死がこの世に入り、悪魔に属する者が死を味わうのである」(2・24)。

イスラエルの民を贖った神は、また創造主でもある。したがって、贖いと創造あるいは新しい創造が結びつけられている(詩33 イザ45・18、65・17-25)。

イザヤは、すでにメシア時代がどのような状況であるかを描いている。それは、創世記1章で語られている、神の造られた人間と動物の秩序の回復でもある。「狼は子羊と共に宿り、豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち、小さい子供がそれらを導く。牛も熊も共に草をはみ、その子らは共に伏し、獅子も牛も等しく

干し草を食らう。乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ、幼子は蝮の巢に手を入れる。わたしの聖なる山においては何もの害を加えず、滅ぼすこともない」(イザ11・6-9)。パウロは、人類の最終的な贖いは全被造物の贖いを伴うと教える(ロマ8・18-24)。そして、壮大なスケールで、キリストを中心とした救いの歴史を総括する(二コリ5・18-19、コロ1・13-20、エフェ1・4-10)。第二のアダムキリスト(ロマ5・12-21、一コリ15・45-49、二コリ4・4)によって、すべては新たにされる(一コリ15・22-28、黙21・1、5)。内的に新たにされてきたキリスト者は(ガラ6・15、コロ3・10)、キリストの贖いのわざによる再創造の働きに参与するよう招かれている(ガラ3・26-4・7、LG 36項^(註))。

むすび

- (1) 人間は自然の一部として神によって創造された。
- (2) 自然は人間のためにあり、したがって人間はそれを「管理」し、その恩恵に浴することができる。
- (3) しかし、人間は自然の絶対的の主人ではなく、自然を委ねられている(一コリ3・22-23、8・6)。したがって、それを破壊するのではなく、それをいづくしみ、癒し、育む義務がある。それを理解し、実践できるのは、キリストの霊によって内的に新たにされ、神の真理と正義と愛に生きる人々である(ロマ14・17-19参照)。

Ⅲ 司祭としてどのように環境問題と取り組むか

以上のような現実と聖書の教えを前に司祭として何を認識し、何をなすべきだろうか。

1 司祭の位置

キリストは「見えない神の姿」であり、万物は彼において造られた、彼はすべての者よりも先にあり、万物は彼において成り立つ。彼は初めであり、死者の中から最初に生まれた者である。それは、彼が万事において第一の者となるためである(コロ1・15-18参照)。彼は偉大な力をもって天上のものと地上のものを支配し、卓越した完全さと働きによって、その栄光の富をもって体全体を満たす(エフェ1・18-23参照)(LG 8)。司祭は、このキリストの体に特別に結ばれている。一方、「今日、人類はますます政治的、経済的、社会的に一つに結ばれつつある。したがって、司祭は、全人類が神の一つの家族となるよう、司教と教皇の指導のもとに、思いと力をも一つにして、分裂のあらゆる原因を取り除かなければならない」(LG 28項)。

2 司祭としての問題意識と実践

(1) 問題意識

司祭は、すでに「若者が自国で高等教育課程へ進ために要求される人文的、科学的教育を修了し」(OT 13項)、「哲学科目は、学生がまず人間と世界と神についての堅固で一貫した知識を得るために手ほどきを受けるようなしかたで教え」(OT 15項)られたはずである。また「哲学と人生の真の問題」(OT 15項)について学んだ。しかし、このことには、常によく注意すべきである。ところで、「人生の真の問題」の中に、現代社会の深刻な問題である環境問題が含まれてしかるべきである。とくに、「この世のいのちに愛をもって実りをもたらすという彼ら(信者)の義務を明らかにしなければならない」(OT 16)倫理神学の立場からしても、環境問題は司祭の職務と決して無関係ではない。

(2)実践

貧しさの精神と地球を愛する精神をもってこの問題と取り組むようにする。そのためには一方ではエネルギーや水などの資源の節約や食糧や生活用品の浪費を避け、他方では自然を大切にして汚染を防ぐなど大いに心がけるべきである。このようなことを自ら実践するだけでなく、牧者として、信者や地域社会の人々に、自然環境に関する聖書のメッセージを宣べ伝えるようつとめなければならない。

(a)貧しさ

貧しい人々により便りをもたらすために遣わされた司祭は、豊かであったのに人々のために貧しくなられたキリスト(二コリ8・9、フィリ2・6-8)に倣って、貧しさの幸い(ルカ6・20)を自分の生活の中で告げる。貧しさの精神と実際の貧しさは司祭の身分の一部である(PO 17項参照)。貧しさは、司祭がさまざまな状況の中で、心から堅持し具体的に実現しようとする生活の理想でなければならない。従って、無駄を少なくし、自分が遣わされる相手である貧しい人々の条件を分かち合わなければならない。司祭は、持っている物を、その目的を尊重し、他の人たちの必要に兄弟として心をかけながら、控え目に使うように心がける必要がある。結局司祭は、人間性のこの面を大切にし、公正さと離脱の精神を持つように努めなければならない(OT 9項参照)。また教会の財産も正直かつ無私無欲の精神で用いなければならない。なぜなら、司祭はこの領域では神の前で保護者かつ管理者であって、所有者でないからである⁽²⁶⁾」。

一人の小さな節約は地球を救うことになる。わたしたち自身ができること、そして信者たちに勧めることができることとして、たとえば次のようなことが挙げられよう。

水(洗顔、シャワー、風呂、トイレ、洗濯)の節約。／節電(無駄なつけっぱなしをしない、ドライヤーを使用しない、充電式の電池を使用する)。／紙(ノート、メモ用紙、OA機器用紙、コピー用紙など)の節約。新聞や雑誌をリサイクル・センターに送る。再生紙利用のものを買う。エコ・バッグを使う。牛乳パックの回収。／アルミ缶の回収。／ガラス瓶の回収。／プラスチック製品を用いない。山や海や海岸を汚さない。ビーチ・クリーンアップ運動に参加する。／植樹。／収益の寄付。

(b) 自然愛と保全

自然は神の愛の賜物である。「神である方、天を創造し、地を形づくり、造り上げて、固く据えられた方、混沌として創造されたのではなく、人の住む所として形づくられた方、主は、こう言われる。わたしが主、ほかにはいない」(イザ45・18)。わたしたちは健全な自然環境を次の世代に伝える義務がある。そのためには、動植物を大切にし、彼らと平和共存していかなければならない。そして植林を盛んに行い、汚染箇所があればそこから汚染を取り除くという地道な行動を具体的に取る必要がある。教会が世の中にいることを忘れてはならない。そして自然を愛し大切にすることは、結局人を愛し大切にすることと同じである。

また、神によって造られ、人類に与えられた大地を正しく利用することは神の正義と愛によって求められている。「神は、地とそこにあるあらゆる物を、すべての人、すべての民の使用に供したのであり、したがって造られた富は、愛を伴う正義に導かれて、公正にすべての人に行き渡るはずのものである」(GS 69項)。この原則が守られないとき、環境が破壊されるだけでなく、人類は不幸に見舞われ、滅びを免れないであろう。わたしたちにできることはないだろうか？

註

- * 『大神学院紀要』第5号、一九九一年、81-111頁。本小論は一九九一年のものであるが、第二パチカン公会議公文書の引用の修正以外はほとんどそのままにしている。教皇フランシスコの回勅『ラウダー・シ』(二〇一五年)は現代の人々にとって基本的な教えとなっている。
- (1) 一九七二年六月の国連人権環境会議に次いで、一九九二年六月にはブラジルで、「環境と開発に関する国連会議(UNCED)」が開かれる。これに備えて、環境庁と官民合同で「地球環境日本委員会」が去る五月に発足した。その他さまざまな国際的な取り組みについては、環境庁編『平成三年版 環境白書 総説』大蔵印刷局 平成三年 81-86 114-130、198-205頁を参照。
- (2) 環境庁編『平成三年版 環境白書』(総説・各論二巻 大蔵印刷局 平成三年参照)。
たとえば、福岡県環境整備局は、今年7月の二か月間を「県環境月間」と定めて、「環境にやさしい暮らしと社会を求めて」というテーマのもとにさまざまな活動を行った。
- (3) たとえば、今年五月に、「全国牛乳パックの再利用を考える連絡会九州ネットワーク」が結成された。下郷さとみ編『地球と生きる55の方法』ほんの木 一九九〇年 巻末の1-4頁参照。
- (4) 日本経団連が、一九九一年四月三日、地球的規模の環境保全に対する企業の役割と行動指針を明記した「地球環境憲章」を発表した。ジ・アース・ワークスグループ編『地球を救うかんたん50の方法』講談社 一九九〇年。ジ・アース・ワークスグループ編『子どもたちが地球を救う50の方法』プロンズ新社 一九九〇年。下郷さとみ編『地球と生きる55の方法』ほんの木 一九九〇年他参照。
- (5) 一九九〇年六月二日から七月六日までコロンビアのボゴタで開催された第四回カトリック聖書連盟(CIC)総会は、その報告書の中で、環境問題は現代世界を取り巻く状況の一面であり、すべての人にとって聖書がよい便りとなるためには、聖書特に創世記1-11章の読み直しや、人間が単に被造物の頂点にあるだけでなく、その一部でもあるという教えを再確認する必要がある(6・3)、従って環境問題を聖書研究のひとつのテーマとして取り上げるべきであると勧めている(8・3・5・7)。その他学会や研究グループなどで研究されている。なお、邦文の文献として次のようなものがある。クラウス・ヴェスターマン「創造」(現代神学の焦点)新教出版社 一九七二年。「ツインク」美しい大地 破壊される自然と創造の秩序」新教出版社 一九八三年。倉松功「ルターにおけるキリスト教と文明」神の支配に仕える人間の支配」人類・文明の救済とキリスト教」市川恭二先生喜寿献呈論文集 聖文舎 一九八七年 35-51頁。西村一之「神および人間と自然」同書 145-166頁。近藤勝彦「自然の神学」特にパネンベルクのそれをめぐって」同書 167-182頁。ドロテー・ゼレ「働くこと愛すること 創造の神学」日本基督教団出版局 一九八八年。ゲルハルト・リーター「生態学的破局とキリスト教 魚の腹の中で」21世紀キリスト教選書 新教出版社 一九八九年。22頁に若干の文献が挙げられている。W.ツインマリ「旧約聖書の世界観」(聖書の研究シリーズ32)教文館 一九九〇年。「モルトマン」創造における神」(「モルトマン組織神学論叢」新教出版社 一九九一年。本多哲郎「環境問題と福音の視点」福音宣教」3(99)41-45頁。今道瑤子「ロマ書8章19-23節が環境問題に訴えること」同誌5(96)2-23頁。里野泰昭「神の栄光のあらわれである自然」同誌6(99)55-58頁。満留功次「残ったパンくずを集める人との出会い」環境問題の倫理」同誌6(96)66-68頁。
- (8) 子供向けの本から、専門書まで多数の文献があるが、ここでは手持ちのものを紹介するにとどめる。環境庁編『平成三年版 環境白

- 書 総説「大蔵印刷局 平成三年 31-65頁。石弘之他「地球の健康診断」(全5巻)草土文化 一九八九〜一九九〇年。M.ブライト他「世界はいま...自然環境論」(全4巻)佑学社 一九八九年。人類とエネルギー研究会編「地球環境と人間」省エネルギーセンター 一九八九年。人類とエネルギー研究会編「原発と人間」省エネルギーセンター 一九八八年。原田憲一「地球について 環境危機・資源枯渇と人類の未来」国際書院 一九九〇年和田武「人間と自然との新しい関係 地球環境論」創元社 一九九〇年。環境庁地球環境保全戦略研究会編「各論二巻」大蔵印刷局 平成三年。環境庁地球環境保全戦略研究会編「各論二巻」大蔵印刷局 平成三年。日本弁護士連合会「公害対策・環境保全委員会編」日本の公害輸出と環境破壊「平文社 一九九〇年。金子史朗「レバノン杉のたどった道」原書房 一九九〇年 21-58頁参照。レバノン杉の象徴的な意味については、マンフルート・ルルカー「聖書象徴事典」人文書院 一九八八年「レバノン杉」の項(396-7頁)参照。
- (11) Echaras 5, 48 = J.M. Myers, *I and II Esdras*, The Anchor Bible 42, Double-day & Co., Garden City, 1974, p.50.
- (12) H. & A. Koltzenke「聖書の植物」八坂書房 一九八七年 106頁。
- (13) リン・ホワイト「機械と神」みすず書房 一九七二年 87-91頁。H.ゲルハルト・リーケ著 安田治夫訳『生態学的破局とキリスト教魚の腹の中で』新教出版社 一九八九年 24-25頁 訳者による引用。
- (14) 山田経三訳 カトリック中央協議会発行 一九八八年 62と68頁。
- (15) P.シュムルダース「サクラメントウム・ムンデイ」の「創造」の項。瀬本正之訳『神学ダイジェスト』53号(一九八二年)105頁。
- (16) W.ツインマリ「旧約聖書の世界観」教文館 一九九〇年 48-49頁。
- (17) 同書 59頁。
- (18) 同書 70-77頁。
- (19) 同書 61頁。
- (20) H. Biehnhard + 月本昭男「名」旧約新約聖書大事典「教文館 一九八九年 843頁。
- (21) W. ツインマリ 上掲書 82-83頁。
- (22) 同書 90頁。
- (23) 同書 101頁。
- (24) 同書 95頁。
- (25) 今道瑠子「ロマ書」8章19-23節が環境問題に訴えること『福音宣教』5(1991)21-23頁参照。
- (26) Cf. C. Pro Genium Evangelizatione, *Quelques directives concernant la formation dans les grands seminaires*, 10°, PO 17°

《参考文献》

柿内賢信「人間と自然について」(NHKボックス286)日本放送出版協会 昭和五二年

- 石弘之他「地球の健康診断」(全5巻)草土文化 一九八九〜一九九〇年
M.ブライト他「世界はいま...自然環境論」(全4巻)佑学社 一九八九年
人類とエネルギー研究会編「地球環境と人間」省エネルギーセンター 一九八九年
人類とエネルギー研究会編「原発と人間」省エネルギーセンター 一九八八年
原田憲一「地球について 環境危機・資源枯渇と人類の未来」国際書院 一九九〇年
和田武「人間と自然との新しい関係 地球環境論」創元社 一九九〇年
環境庁地球環境保全戦略研究会編「各論二巻」大蔵印刷局 平成三年
環境庁編「平成三年版 環境白書」総説・各論二巻 大蔵印刷局 平成三年
日本弁護士連合会公害対策・環境保全委員会編「日本の公害輸出と環境破壊」平文社 一九九一年
J. アース・ワークスグループ編「地球を救うかんたんな50の方法」講談社 一九九〇年
ジ・アース・ワークスグループ編「子どもたちが地球を救う50の方法」プロンズ新社 一九九〇年
下郷さとみ編「地球と生きる55の方法」ほんの木 一九九〇年
クラウス・ヴェスターマン「創造」(現代神学の焦点)新教出版社 一九七二年
「ツインク」美しい大地 破壊される自然と創造の秩序」新教出版社 一九八三年
倉松功「ルターにおけるキリスト教と文明」神の支配に仕える人間の支配」人類・文明の救済とキリスト教」市川恭二先生喜寿献呈論文集」聖文舎 一九八七年 35-51頁。
西村一之「神および人間と自然」人類・文明の救済とキリスト教」市川恭二先生喜寿献呈論文集」聖文舎 一九八七年 145-166頁。
近藤勝彦「自然の神学」特にパネンベルクのそれをめぐって」人類・文明の救済とキリスト教」市川恭二先生喜寿献呈論文集」聖文舎 一九八七年 167-182頁。
ドローテ・ゼレ「働くこと愛すること 創造の神学」日本基督教団出版局 一九八八年
ゲルハルト・リートケ「生態学的破局とキリスト教 魚の腹の中で」(21世紀キリスト教選書)新教出版社 一九八九年
W. ツインマリ「旧約聖書の世界観」(聖書の研究シリーズ32)教文館 一九九〇年
「モルトマン」創造における神」(J.モルトマン組織神学論叢2)新教出版社 一九九一年
本多哲郎「環境問題と福音の視点」福音宣教」6(1991)41-45頁。
今道瑠子「ロマ書」8章19-23節が環境問題に訴えること『福音宣教』5(1991)21-23頁。
里野泰昭「神の栄光のあらわれである自然」福音宣教」6(1991)55-58頁。
満留功次「残ったパンくずを集める人との出会い」環境問題の倫理」福音宣教」6(1991)66-68頁。